

浮嶋八幡の仮面について

小 野 一 郎

目 次

I 抄 録

II 序 言

III 考 察

- (1) 浮嶋八幡蔵の仮面について
- (2) 形体について
 - (a) 仮面の輪郭より正中線 L_1M_1 を想定した場合
 - (b) 両眼球の中心を通る直線を水平線と想定した場合
- (3) 額について
- (4) 眼辺について
- (5) 頬について
- (6) 鼻について
- (7) 口辺について
- (8) 顎について
- (9) 裏面について
- (10) 紐孔について
- (11) 結言・後記

(12) 浮嶋八幡蔵仮面・寸法・計測一覧表

小野一郎計測

IV 参考文献

V 補遺 (西田教授記述)

挿 図

Fig.

- 1 写真 浮嶋八幡・正面景観
- 2 " 仮面・前面
- 3 " "・右側面
- 4 " "・左側面
- 5 " "・左斜側面
- 6 " "・裏面
- 7 計測図 仮面・前面図 原図実物 $\frac{1}{4}$ ×凸版 $\frac{1}{2}$
小野一郎原図
- 8 " "・正中線想定図 " "
- 9 " "・左側面図 " "
- 10 説明図 "・額・横皺 小野一郎原図
- 11 " "・眼球 " "
- 12 " "・下歯上面 " "

指 導

東京芸術大学 美術学部教授 西 田 正 秋

I 抄 録

浮嶋八幡蔵の木彫仮面で、裏面に長享2年戊申9月20日の墨書銘と、作者玄祐法師の刻銘のある仮面について民俗学的問題には触れず、人体美学の立場から計測し、顔面の美的効果の考察への基礎資料としたものである。

II 序 言

仮面は造形芸術の中で特殊な位置におかれており、また特殊な性質を具有していると思われる。

特殊な位置というのは、例えば従来の美術史の中では、純粹の彫刻の分野の中に入れられるよりも、工芸の一部に入れられている方が多いように思われる。その理由は仮面の多くがただ存置して觀賞するだけでなく、着

面して演技することが多く、即ち純粹觀賞以外に用途を持つが故に、工芸的性質があるものと考えられているのだろうと思う。然しながらその着面演技という用途の目的そのものが、また一般工芸のように実用ではなくて、やはり美の觀賞という場合が多いのだから、仮面造形の性質は一般工芸よりは純粹造形に近い場合が多いものと考えられる。それにしても純粹彫刻とやはりちがう点は、静的状態における觀賞のみを主体とせず、動的状態における觀賞がむしろ仮面の生命となること、仮面をして一般彫刻と同列ならしめない最も大きな特徴と考える。

特殊な位置はおよそ以上の如くとして、特殊な性質の方は仮面を一造形・一彫刻として見た場合に、全身像・上半身像・胸像・頭像等と段々身体の一部を表現して他の不要と思われる部分を切り捨てて行く場合に、一般常識としては頭像位までがその切り捨ての極限かと思われるのに対して、仮面は実に顔面のみを主体として、他の人体の部分の全てを切り捨ててしまったというところに

第1の特性があると思う。第2の特性は一寸前文にもふれたように彫像のように、静的観賞が主体になるべき純粹の造形芸術とはいいがたく、その着面演技による動的状态において、初めて真の美的効果を発揮するという、一般造形芸術の範囲には入りたくない特殊な基礎条件と特性を有するところに、仮面の最も特殊な意味と研究の困難さがあると思われる。

ひるがえって世界における仮面造形の存在分布を概観すると、西洋方面では既に古代エジプトから仮面があり、古代ギリシャでは仮面劇さえあったのだが、それ以後西洋では仮面造形は余り振るわず、現代に至っていると思われる。これは彼等の遵法する realism が仮面の非現実性を培養しなかったのだと思う。

しかるに東洋では印度・チベット・中国・蒙古等、南方ではタイ・カンボジャ・ジャワ等、それに極東の日本など、古代から現代まで、実に多くの国が豊富な仮面造形を保持して来ている。

殊に我国は飛鳥時代に伎楽面、奈良時代に舞楽面、鎌倉時代に猿楽面・田楽面、また室町時代には世界仮面芸術界における最高の表現と思われる能面・狂言面が創作され、その後江戸時代までには、以上の各時代の種々な仮面が model または text となって、民衆化された民俗芸能用の土俗面等が、多種多様に分かれて全国の隅々にまで分布しており、我国は実に世界における仮面造形の宝庫だと思われる。(以上西田教授口述)

そこで西田教授は戦前古くから仮面造形に注目して、若干の研究をなお継続中であり、同研究室においても、目下その一部を研究中とのことであるから、世界的に仮面造形に関する概観や歴史や分布などについては、その方での研究結果を期待することとして、私は地の利がある関係上、九州殊に大分県内に分布する民俗仮面の研究を分担しようと思いたち、その手始めにこの一小論に着手した次第である。

凡そ民俗芸能等に関しては民俗学者が研究すべき範囲であり、既に多くの業績も示されている。例えばその文学的研究では故柳田国男・故折口信夫氏等の先達權威があり、造形関係では故柳宗悦氏等がその道を啓蒙された。然しながら村の祭の行事として行われる民俗芸能の由来・系統・比較類型学的研究・分析・分布等については、多くの業績もたらされているが、それらの仮面造形だけについての造形的・美術的研究は殆どなされていないように思われる。その盲点を追究しつつあるのが、西田研究室の指導方針なので、私もその主旨に沿ってまず郷土大分県の作例からとり組むことにしたのである。

III 考 察

(1) 浮嶋八幡蔵の仮面について

- (a) 所在 大分県速見郡日出町真那井
- (b) 所蔵 浮嶋八幡
- (c) 名称 不明
- (d) 作者 裏面の刻銘によれば玄祐法師
- (e) 時代 不明
- (f) 由来 不明
- (g) 彩色 なし
- (h) 材質 樟材
- (i) 重量 1250g
- (j) 寸法 縦径340mm×横239mm×高さ(厚み・平均)10mm(その他、各部分の寸法は計測値一覧表参照のこと)
- (k) 破損及び補修 右眼外側方に上下約110mm、左右約35mmにわたり虫害と思われる破損がある。また左前額の縁より左眼球を斜内下方によぎり、鼻翼外縁に沿い、直下して上唇に至り、左口角下端より外下方に走り、顎左後方の縁まで裂目があり、別に右口角下端より右顎後方の縁に至る裂目があって、本仮面を3分していたものを、近時補修している。

(1) 浮嶋八幡について(縁起書抜萃)

祭神仁徳天皇・皇后仲臣命・神功皇后・応神天皇・日本武尊・仲哀天皇

祠は初め大神村真那井白山(或云城山)に鎮座せしを、中古今の海浜浮嶋に遷せしなり。故に浮嶋八幡と称す。創立縁起に就きては碩田叢史に次の如く見えたり。宮記云。人王八十二代後鳥羽院、建久九年戊午長老闕名詣于相州鶴ヶ岡八幡宮太神託長老曰、我欲垂跡於豊州金鳩三羽有喬木者応鎮我於其処、長老敬諾巡回豊後、到真那井、金鳩有松枝、於是勸請鶴ヶ岡八幡、其遷行幸古路不生竹木、見者奇之、宮之处在浮嶋之西白山、国俗曰、帆船過社前則必覆矣、故中古遷於今浮嶋。

同八幡縁起書に、建久の頃四国の沙門転法長老鶴ヶ岡に巡礼して一千日法華經を読む。一夜神長老に託して曰、我諸国に分神して有縁の衆生を度せんと。於茲長老建久九年九月廿日真那井に勸請す。曆仁元年二月社頭荒廢に及び大友親秀修復し、建治三年十月再び荒廢に及び大友頼泰之を造替すと。同村白山古宮の辺を長老ヶ鼻と称し、尚長老墓と称するもの同所に在り。中古里民基部を穿ちて石櫃を得たりしも櫃の内部悉く朱なりしより、穿者驚きて素の如くせりと。

(2) 形体について

(a) 仮面の輪郭より正中線 L_1M_1 を想定した場合

仮面の輪郭よりみて Fig. 8 のように、正中線 L_1M_1 を入れてみると、額正中上方の陽刻の剣状突起（仮称）の形体と、額の横皺の中心と思われる V 字形の尖端はいずれも左に、鼻尖・人中・唇・歯列等は右にずれ、右眼が左眼に比してかなり上方にずれている。即ち(a) L_1M_1 は仮面の輪郭を基準として設定した理念的な正中線であり、次の(b) L_2M_2 の方は仮面上の諸構成（額の道具）に添った本仮面の即物的な正中線である。なお Fig. 7・8・9 は大体正投象図法に基づいて作図したものである。

(b) 両眼球の中心を通る直線を水平線と想定した場合

Fig. 8 のように両眼球の中心を通る直線 ab を引き、額の剣状突起のほぼ尖端と鼻尖を結ぶ直線 cd を引き、その交点を O とすると $\angle cob = 85^\circ$ 、 cd は (L_2M_2) に一致し、この L_2M_2 における両眼の位置は (a) L_1M_1 のそれに比較してかなり正常に近い。顔面の左右不均斉については、西田教授の「顔の形態美」に詳述されているので、ここでは省略する。因みにこの交点 O は、 N (Nasion・鼻根点=鼻骨上縁正中点) と称して、人類学等での人体計測学上に指定された定点の 1 つにほぼ該当し、重要な位置である。

以上(a)(b)から考察すると、作者は L_2M_2 を正中線の方角として製作したが、でき上がった仮面はその全体の形体・輪郭から見ると、その正中線は L_1M_1 の方向になり、かなり右へ歪んだものになっていることが判る。これは作者が意図した *déformation* というより、むしろ面打ち（即ち仮面彫刻家）の技術の稚拙さと不用意による非意図的な狂いと考えられよう、右眼と鼻根部（ O 点）との境・右眼内下方と鼻翼上端附近との境の 2ヶ所が、少しではあるが裏面まで打ち抜かれていることなども、それを裏付けるのではあるまいか。

(3) 額について

額のほぼ中央に向って、頭頂より下降している中央を囲ませた剣状突起の陽刻は、何を意味しているか不明である。我国の代表的仮面の中には例をみないようである。或は額をひきしめ、より強さを表現する為か、或は靈威を強調する為かの作者の創意によるものかも知れない。

前頭筋 (M , *venter frontalis*) の作用により、眉が上へ上げられ額に強く 1 条の横皺が作られる。この仮面ではかなり彫りの深いこの横皺が、1 本の線として額を左右へ流動しているというより、むしろ想定正中線 L_2M_2 を起点として左右へ大きな *curve* を描いて図案化されているといえよう。この趣きは観世音寺蔵・舞楽面・

納曾利のそれに近い。Fig. 10 の 1:2 と 4:5 は、ほぼ平行である。2:3 と 5:6 の間隔が 1:2・4:5 に比して外上方へ拡って広がっているのは、眼高上縁 (*Margo supraorbitalis*) をぐっと外上方へつり上げ、眉尻の太い眉を表現したものであろうか。3:6 と前述 L_2M_2 と交るあたりと、外眼角(外眦・目尻)辺との落差は約 50mm、もあり、深い彫りである。もし 2:3・5:6 で眉を表現したものだとする、額の横皺は 1:4 の 1 本ということになる。或は 3:6 が眉弓で 2:5 が眉の上辺と横皺とを兼ねた表現であるとも考えられ、またこの仮面の場合露出した眼球に大きな *point* がおかれているため、眉の表現効果は余り必要でなかったということもあるかも知れない。

1:2・4:5 がそれぞれ平行で、2:3 と 5:6 が平行でないということは、同心円的くり返しの線をさけることにより、額の横皺の表情をより複雑にして *mouvement* (動勢) を出しているものと思われる。1:2・4:5 の左右の *curve* の相違は、作者の意図した *déformation* というより、面打ち技術の稚拙さによるものではなかろうか。

(4) 眼辺について

本仮面の目は舞楽面中の「退走徳」のように、上眼瞼・下眼瞼を欠如して、眼球が露出した形相を呈している。眼球前面は外眼角の外側方の皮膚面より約 35mm、突出している。右眼左右径 63mm、上下径 68mm、左眼左右径 60mm、上下径 65mm、で、ほぼ円に近く、右眼の方がやや大きい。えぐられた眼球孔は左右とも Fig. 11 のように ab 径 19mm、 cd 径 20mm、でやや歪み、前面はいくらか外方を向いている。両眼球が平行した方向に歪んでいるのは、作者の彫る時の手勝手のためでもあろうか。なお両眼球孔が墨のようなもので黒くぬられているのは、素材のままより額面の *point* としてよりその集中度と威赫感等の効果を高めていると思う。眼の表面はかなり技巧的に処理されており、顔面中、最も注目される所故に作者の意識が集中したものと考えられる。

(5) 頬について

鼻翼上部より外眼角へ半円形に、左右それぞれ 2 本づつのかかなり深い皺が刻まれている。右頬は右眼外眼角より外方が虫害のため傷んでいるので明確でなく、左右の円弧の相違を十分比較することはできないが、この皺は頬骨筋 (M , *zygomaticus*) の作用により、口角を外上方に引き上げた場合に起こる外眼角外側方に生じる多くの皺の表現であろう。能面の翁・父尉等にこの皺によく似た皺を見るが、老令者の外眼角に生じる皺と、この仮面のそれとは異ったものであろう。

側面から見ると鼻翼外側方が外眼角辺より水平位にし

て約35mm. 突出している。側面から仮面全体の凹凸の rhythm を見ると、額で突出し、外眼角辺で凹み、この鼻翼外方の頬（もちろん鼻尖を含めて）で再び突出し、大きく開かれた口角で凹み、再び顎で突出するという凸凹の rhythm が考えられる。

なお顔面を縦に半分にして、皺の rhythm を上下に見ると、上から額の皺が大きな弧で外眼角へ集まり、外眼角から頬の皺が鼻翼へ弧を描き、そこから鼻唇溝が口角をまわって顎に達しているというくり返しの rhythm が見られる。この皺の rhythm が様式化され、図案化され定型化されて受けつがれ、或は顔面表情の相違等に無関係に使用されたということも考えられるが、その系譜等については後日の研究課題としたい。

(6) 鼻について

顔面のほぼ中央にどっかと位置している鼻は、鼻翼間の最大巾100mm.の偉大な鼻である。側面から見ると所謂ユダヤ鼻（鷲鼻）に近く、仮面仰置の水平面より131mm.の高さである。鼻孔は右がやや大きい。

鼻根部に逆三角形の形をしたものが刻まれているが、これは鼻根筋（M, procerus）の作用による鼻根部にできた横皺を表現したもののようで、その表情は他筋と相俟って忿怒・残忍等を意味して来るものである。写真でみる限りでは、我国の多くの仮面がこの筋の表現に、さまざまな工夫をこらしているようであるが、この美的効果については、他の仮面との比較の上で後日考察したい。

(7) 口辺について

前述した頬骨筋（M, zygomaticus）の作用により口角がやや外上方に引き上げられている。口は横に拡げて伸び、鼻唇溝は口唇の上側方を廻る、かなり稜の明確な著しい弧溝となっている。ここでは線或は溝というより、鎬（しのぎ）の立ったより立体感を持ったものとして感じられる。

人中は Fig. 8 にる正中線（L₂ M₂）の方向に沿ってごく浅く彫られている。

口は開口・上下歯露出で、口の中は両口角外方間で159mm.内方間で140mm.上唇と下唇正中間54mm.で、ただ口を大きく開いたという形ではなく、かなり意志的・意図的に横に拡げた形式をとっている。

歯列は切歯・臼歯等の区別はなく、全部切歯状で、上歯11本、下歯12本が表現されている。上歯の各巾を見ると、右より15・19・20・20・21・22・20・21・19・17・5mm. 下歯はやはり右より左へ5・13・17・18・17・17・18・19・17・15・15・12mm.となっており、縦径は上下歯とも正中線附近で約15mm.となっている。Fig. 12で見られるように、下歯列を上方から見ると、各歯の境にこ

く浅い溝、むしろ線彫といった方が適当と思われる程度の凹みが刻まれているが、上歯列にはない。（Fig. 12）

切歯・犬歯・臼歯の区別がないのは、作者が写実的に歯を表現しようとせず、歯という通念のもとで製作したためであろう。各歯の表面も中央部に軽い脹らみはなく、殆ど平面的である。

側面から見ると、下唇・下歯が上唇・上歯より、かなり前方へ突出しており、ただ口を大きく開いたというのではなく、所謂下顎を突き出した形になり、威圧感に一層意志的なものが加わっているように感じられる。

(8) 顎について

頤端が浅くではあるが、所謂二重顎になっており、これにより重量感・威圧感を増す効果を出しているが、他の部分の彫りに比べてやや無雑作の感もある。側面から見ると、下唇から頤端へかけて浅い凹みがある。

人中のほぼ真下に、顎を上下に貫いて浅い凹みが彫られ、顎をひきしめている。鼻唇溝下端附近にある左右それぞれ2箇所ずつの孔は切顎をとめるための紐を通す紐孔ではなく、破損して切断された顎をとめるために、後世あけられたものようである。土地の古老もここに紐を通して結んでいたと話していた。もちろん髭髯のための植毛の穴ではないと考えられる。

(9) 裏面

裏面の鑿の touch は、面打ちの技術の巧拙や鑑定等に頗る重要である。裏から見ると、仮面全体の輪郭はほぼ洋樽形をしている。仮面の厚味は平均約10mm.位である。鑿の touch の方向も大きさも不揃いで、表面の彫りに比較してただ「すいた」という感じが深い。

左眼外側方に上下に長享二年戊申九月廿日（1488.室町中期）の墨書銘がある。これがこの仮面の製作年月日を示すものかどうか不明であるが、浮嶋八幡を勧請したといわれる建久九年九月廿日（1198.鎌倉初期）と奇しくも月日が一致するのは、或はそれを記念して、約290年後に奉納した月日であるのか、種々推想も成り立つが、専門外のことであるのでここではふれないでおく。

顎の正中線より右方に、2行に作者玄祐法師というかなり鋭い刻銘がある。作者自身の刻銘であるか、後世に刻したものであか不明で、まだ玄祐法師についても調査不十分で不明である。

墨書銘上部に巾25mm. 深さ8mm. の蝶形のくさびの痕跡があるが、或は製作当時既にこの部分にひび割れが生じたか、割れる恐れが予測されたために、それを防ぐのにくさびを打ったのではなからうか。

(10) 紐孔

頭頂より140mm. 辺の左右に巾5mm. 長さ10mm. 程の上下に長方形の孔があり、内側がやや広がっている。

ここに紐が通され、この仮面が着用されたかどうかは不明で、かなり大型のものであるため、着面はせず、ただ奉納したものであったのかも知れない、土地の老人の話では、神事の際にもこの面を着けたことはないとのことである。

(11) 結 言

序論で述べたように、郷土の仮面の人体美学的研究の手初めとして、この仮面をとりあげたわけである。この仮面は舞楽面・能面等に比して、その作柄は遙かに及ばないにしても、樟材という材質、古様を伝える素朴な技法等、貴重な土俗面であろう。この研究を出発点として

郷土の仮面研究をおし進め、その系譜等を究明したいと考えている。なお研究途上に於て、民俗学的問題が起ることは当然予想されるが、この点については諸賢の研究と教示をまちたい。

後 記

初めての仮面研究に懇切な御指導をいただいた恩師西田教授をはじめ、御教示くださった日出町佐藤暁氏、そして心から研究に御援助くださった浮嶋八幡氏子総代の小石光氏・三浦庄司氏・三浦金吾氏並びに近藤徳美氏、写真撮影等に御支援くださった河野公記氏に感謝の意を捧げるものである。

Tab.1 浮嶋八幡蔵仮面・寸法・計測・一覧表 小野一郎計測

図版 (Fig.)	付号	仮 面 部 位	mm.	備 考
8	L ₁ M ₁	仮 面 縦 径	340	顔面諸器官の正中線を通らない
"	L ₂ M ₂	" 正中径	335	" の " を通る
7	e f	" 最大横径	239	
"	g h	右 眼 横 径	63	右63>左60
"	i j	" 縦 径	68	右68>左65
"	k l	左 眼 横 径	60	
"	m n	" 縦 径	65	
11	a b	眼 球 横 径	19	左右ほぼ同じ
"	c d	" 斜 径	20	"
7	o p	鼻 巾	100	鼻翼間最大巾
"	q r	開 口 巾	159	左右口角外方間
"	s t	"	140	" 内方間
"	u v	開 口 上 下 径	54	開口上唇・下唇間 (正中線(L ₁ M ₁)附近)
"	w x	上 歯 横 径	22	正中線 (L ₁ M ₁) 附近, 右より6本目
9		" 縦 径	15	
7	y z	下 歯 横 径	18	正中線 (L ₁ M ₁) 附近, 右より7本目
9		" 縦 径	12	
"	a b	前 額 高	90	仮面仰置の水平面よりの高さ
"	c d	"	50	前額←→外眼角辺との落差
"	e f	眼 球 高	80	仮面仰置の水平面よりの高さ
"	g h	鼻 高	131	"
"	i j	上 唇 高	85	"
"	k l	下 唇 高	100	"
"	m n	上 歯・下歯間	20	正中線(L ₁ M ₁) 附近の上歯下端・下歯上端間
"	o p	上 唇・頤端間	120	
"	q r	下 唇・ "	65	

IV 参考文献

西田 正秋 著 美術解剖学論攷
 同 上 顔の形態美
 岡嶋 敬治 " 岡嶋解剖学
 金子 良運 " 仮面の美
 志手 環 編 豊後速見郡史

V 補 遺

目 次

(1) 小 序
 (2) 仮面の系統と種名について
 (3) 能面との関係
 (4) 能面以前の形式

- (5) 伎楽面との比較
- (6) 舞楽面との比較
- (7) 能面以後の形式
- (8) 浮嶋面の位置
- (9) 表情の分析と解釈
- (10) 浮嶋面の地方的特徴
- (11) 結語
- (12) 仮面関係・文献一覧表

挿 図 目 次

- 第1図 退宿徳・舞楽面・木彫彩色・鎌倉時代・奈良
・手向山神社
- 第2図 蘭陵王・舞楽面・木彫彩色・鎌倉中期・奈良
・東大寺
- 第3図 納曾利・舞楽面・木彫彩色・鎌倉時代・愛知
・熱田神宮
- 第4図 還城楽・舞楽面・木彫彩色・平安中期・奈良
・法隆寺
- 第5図 浮嶋面・歪曲性説明図・西田正秋原図
- 第6図 採桑老・舞楽面・木彫彩色・鎌倉中期・広島
・厳島神社

以 上

(1) 小 序

小野君自身の序言と後記にも述べてあるように、本来かくの如き研究は、戦前から私が企図し、行なって来た研究の1つであって、また現在、東京芸術大学・美術学部・西田研究室において、研究員及び大学院学生をして研究させている研究の1部に属するものである。

ところが、このような研究は即物的なるがゆえに、机上でばかり遂行することは不可能で、各地に自ら探訪して、現地において調査・採集・計測などを行なうことが甚だ多く、かつ必要である。だから今回小野君が、この私達の研究に自ら進んで参加し、その地の利によって、九州方面の研究を分担することを希望・実行し出してくれたことは、私達にとって実に有難い存在なのである。

しかし九州と東京とでは、日々研究室で指導したり、話し合うということができず、遠隔操作による不便を痛感する次第ではあるが、だからといって放置・断念していたのでは、何時まで経っても、かかる方面における地方文化の啓発はできないことになると思うので、一応小野君に開始してもらったわけである。もちろん今回はその総合研究への1部なのではあるが、それでもなお、種々の不備を感じるので、私自身が若干の知見を補遺して、今後の彼の研究への応援としたいと思うのである。

(2) 仮面の系統と種名について

小野君が調査したように、浮嶋八幡蔵の仮面（以下浮嶋面と略称する。）は名称も由来も所蔵者側では不明と

いうことになっているので、その方からの探索の綱は一応切れている。その上、浮嶋面の相貌から見て、従来既知の定型的な仮面の中で、この仮面の相貌に大体合致するような仮面がない。従ってこの浮嶋面の系統や由来や種名等の探索には、今後史学や民俗学や色々の基礎知識・経験のある専門家達が動員されなければ、私達だけでは到底何とも判らない。しかし一応その不明な点などについての考察を、私の専攻範囲の程度で下調べして見ると大体以下ようになる。

(3) 能面との関係

そもそも我国の仮面造形は、古い所では伎楽面・舞楽面等が主体となっており、それ等がより日本化され、通俗化されて田楽・猿楽等の仮面が比較的自由に創作され、それが洗練され定型化されたのが、狂言面・能面として成立し、それ等から一層自由に民衆化され土俗化されたものが、各地方の神楽面・土俗面・玩具面などとして、夥しい変化を示して現在に至っているものかと概観される。

さてそういう見地からして、浮嶋面がその仮面史の流れの中の、どの辺の所に位置するかは、もちろん今後の研究に俟たなければならないが、もし浮嶋面の在銘に信憑性があるとするならば、長享2年（1488、室町中期）は、応永年間（1394—1427）、世阿弥（1363—1443）の能楽大成の頃から既に60～70年を経ているであろうから、長享頃の仮面作例には、既に能面の影響を受けた仮面の製作が行なわれ得た頃だと考えることができると思う。

そこでこの仮面の相貌の様相を観察すると、明らかに能面以前の形式だと観取される表現と、能面及びそれ以後の手法だと考察される表現との両様が共存しているように思われる。その両様を分析して、別個に叙述すると次の如くである。

(4) 能面以前の形式

この浮嶋面は技術粗放であるばかりでなく、能面風の影響を取入れるよりも、より前代の仮面の古様を保持する点の方が多いように思われる。その主なる理由は、

- (a) 半球状の眼球の露出（以下『球眼』と略称する。）と、
- (b) 上下眼瞼欠如（以下『瞼欠』と略称する。）の表現とが、能面などよりも一層極端に形式化されていること。
- (c) 皺襞の表現が能面以上に著しく図案化され、文様化に近づいていること、等である。

というのは、能面はその面種が、たとえ超人的な神格や亡霊・妖怪・鬼畜等を表現する場合にしても、或る程度「人間の顔面」という範疇に即しており、その即現性

の範囲を逸脱することはなく、極端な図案化や文様化や非人間性への移行を明らかに抑制している。(その逸脱を含む能面中の異例は翁おきなの面で、この1種だけは能面以前の形式を多分に保有する特別な古様の面種とされている。その図案化された皺襞、鈴懸の如く装飾化された白眉、切顎などがそれである。また逸脱に関する反例は、球眼・臉欠とびでの例で、大飛出・小飛出・猿飛出等の飛出系統や長靈べしみ意見などの面種があり、いずれも古様を遺存するものと解釈されている。)

(5) 伎楽面との比較

浮嶋面は単にその寸法(size)の大型である点からのみ見れば、将に伎楽面と同級程度の大きさを有しているわけではあるが、伎楽面は概ね顔面のみでなく、頭蓋部まで製作して、人が頭蓋から被れるように構成されているのに対して、浮嶋面は後年の仮面群のように、全く顔面部のみを表示しているのだから、その大きさだけで伎楽面と同列に考えるわけには行かない。

但し伎楽面中に球眼・臉欠を表現した作例がないことはない。崑崙面その他に多少の例がある。しかしそれ等の作例は大牙・尖耳を有し、或は有角で、それ等の相貌は浮嶋面とは全く趣きを異にしている、浮嶋面との直接の類縁は見出し難い。(それ等の大牙・尖耳・有角等の表現は、明らかに獣性が付与されていることを意味し、浮嶋面にはそれ等が表現されていない。)

(6) 舞楽面との比較

前述もしたように、能面がその表現において、ある人間性の顔面の範囲を厳守しているのに対して、伎楽面は時により深刻な写実性の強調・誇張を堂々となす場合が多いのであるが、舞楽面では全くそれと異なり、何の躊躇もなく、顔面の形式化・図案化による非現実的変改・歪曲を濃厚にやってのける特徴がある。従って浮嶋面の系統なり原流なりは、或は舞楽面あたりから発生したのではないかと思われる節が多分にある。

さて舞楽面中には、退宿徳面たいじょうとく(奈良・手向山神社蔵、第1図)等の如く、若干浮嶋面に類似する作例がある。但し退走徳面の方は、眼球が半球状でなく、半卵状に近く、かつ顔面全体に皺襞表現のない所が浮嶋面と違いますが、浮嶋面の額正中上の剣状突起の代りに、眉間に紋様化された皺襞を持ち、鼻が太く短く、口裂が著しく左右に拡がり、切歯(門歯)状の上下歯列が、無機的に多数並列されている点など、他種の仮面よりは幾分浮嶋面に近似すると思われるが、なおこの程度の相似要素では、浮嶋面を同系統からの派生と見ることはまだ困難だと思ふ。(但しこの歯列の無機的な並列表現は、伎楽面・舞楽面ともに見られる一形式である。)

次に浮嶋面の皺襞の表現は、異常に彫刻が深くかつ鋭

く、所謂『鑄しのぎが立って』(稜線の鋭利なこと)いて、かような仮面の技法は、他の定型的な作例にはあまり見ない程である。但しこの皺襞の様相は、蘭陵王・納曾利らりようおう なそり・還城楽げんじょうらく(第2, 3, 4図)採桑老等の強剛または老翁を表示する舞楽面における図案化された皺襞表現に最も酷似している。しかも浮嶋面では額正中部の皺襞がV字形に尖っているが、これほど鋭く図案化しているのは舞楽面中にも少ない。またこの蘭陵王・納曾利等は球眼・臉欠で、しかも所謂『吊り眼』(可動性)になっている。

かような諸点から考えると、浮嶋面の『臉のモデル』か『潜在的なテキスト』は、或はこの納曾利あたりであったかも知れないとの推想を懐く。尤も納曾利そのものの相貌は、浮嶋面よりは遙かに莽猛であり熾烈であって、上下4本の犬牙を突出し、切顎(可動性)でもあって、その形相・風格における迫力はてんで浮嶋面とは比較にならないが、それをより穏かな普通の仮面形に移し、犬歯の猛悪性を除き、より素朴な守護神程度の神性に近からしめたような相貌、それが中央の高貴から地方の民間へ移行し、歴とした専門職から粗野な技術者の手に渡ったのが、この浮嶋面ではあるまいか、との仮りの想定を持つ。

(7) 能面以後の形式

それでは以上の如く浮嶋面は、すべて舞楽面風の古様の『くずれ』のみを示すかという、同面は他方に於て、能面製作確立以後の製作法、つまり能面的作法や技法・構成法等を明らかに用いていると思われる節もあるので、その点について次に叙述する。

それは浮嶋面を側面から見ると、上顎前歯列を、前下方に斜めに突出させ、所謂俗称『外っ歯そつば』のように表現し、開口中の下顎は解剖学的・写実的に云えば、幾分上顎よりも後退されるべきはずなのを、下顎を引込ませないで、逆に幾分前突せしめて、多少俗に云う『受け口』(反対咬合)に近いかの如くに表現している。かくの如き傾向の構成は、開口の著しい能面群において常型的に見られる所で、般若・黒髭・飛出・蛇・泥虎・鰐等々多くの鬼畜面(5番目物)など、皆この下顎突出をなししている。能面においては、この傾向は小面の如き女系の優美な仮面においてさえも見られる、能面表現における著しい1特徴である。

この下顎突出の理由は、1つには普通写実的に開口のために下顎を引込ませると、仮面の下半の造形の輪郭が少なく、かつ整わなくなること、と言ってこれを後方まで十分に彫刻すると、着面して演能者が謡曲を謡うことが、束縛されて下可能になること、等の演能上の用途のために下顎突出と言う歪曲表現(deformation)を

とっているのだと解釈されている。(第5図)一応これで尤もだと思うが、私は仮面が顔面造形と言う特殊表現のために必要とする relief-like な圧縮表現に伴う1種の歪曲 (deformation) をもち、かつこれによって動勢表現 (mouvement) への美的効果を助長せしめているもの、との特殊見解を持っているのであるが、この点の理由の詳述は、あまりに長くなるから今回はこれを省略することとする。

この開口による下顎突出の表現は、仮面の量の大きい伎楽面・舞楽面ではまだ発生しないで、仮面を人間の顔面大で、しかも演出者の顔面に密着させて着用し、かつ発声せしめるということになってからの必然性に起因して、発生し工夫された特殊表現かと思われるから、そういう構成をとる仮面は、凡そ能面確立頃から発生した手法だろうと、私は諸遺例や以上の理由から想定している次第である。そして着面・発声の必要のない面仮の類にまで、この開口時の下顎突出の手法が、仮面表現の必然的な定型として常用されるようになるのは、室町以後であり、またそれが著しく普及し出すのは江戸時代に入ってからだと考えているのである。

この浮嶋面は人が着面して演舞するのには、あまりに大型で重すぎるから、たとえ着面してもデリケートな動作や、急速・活発な行動をとることはできまい。だからもし着用するとしても、ただ『お練り・渡御』等の行進程度か、乃至は祭礼に際して一定の道を静かに前進する程度の着用しかできないであろう。或は全然着面せず、神体として礼拝の対象に安置するか、祭礼に際して鞍などの先に掲揚して行くとかの使用範囲であったかも知れない。それにも拘らず、下顎突出の形式を、必要もないのにとっていることは、この仮面が多かれ少なかれ能面製作の手法を導入するものかと思われるのである。従ってその全般的な形相的特徴は古様であって、能面以前の古様を多く具有するにしても、実際の製作は能面出現以後ではないかと考えるのである。その点からすると、在銘の年次は非常に不当なものでもあるまいといえるであろう。

〈9〉 表情の分析と解釈

浮嶋面の相貌は、性別の点からいえば、まず男性系に入るとされる。性別を明示する決定的な特徴とはないが、かような『どぎつい』強剛な表情をした女性仮面の既存例が殆どないからである。(恐怖をそそるような女面の中で、最も普及したものには般若があり、能面中には橋姫・生成・山姥などもあり、その他土俗面には『三途川婆』などもあるが、恐ろしげな女面は、般若以外には極めて少ない。)

次に浮嶋面の推定年齢は、まあ老翁型に入れておくべ

きであろうが、これは単に皺皺が著しいから年長者の間に入れたまでのことで、しかもこの皺皺表現は必ずしも老齢のみを意味するものではなく、強剛な年長者の顔面筋の躍動を強く表示するための表現手段であること、蘭陵王・納曾利・還城楽等に類するものと考察する。因みに真の老翁を意味する場合には、能面の翁や舞楽面の採桑老(第6図)のように、齒列中に脱落齒の表現などが付与されている。従って浮嶋面の皺皺は現実的な老翁性よりは、尊老思想からする尊老性 (Venerability) による表現をも含むかと考える。

浮嶋面は温和・穏雅・優美等の相貌とは凡そ対蹠的な風貌で、相当強剛な威赫的な無気味な仮面であることは、誰にでも一目で肯けるであろう。しかし犬齒表現をしないことや、尖耳を付加しないことなどによって、この仮面が猛獣性や悪魔性を帯びた野蛮な面種(例えば能面中の所謂『鬼畜物』には有牙・先端の尖った有耳の仮面群がある。)ではなく、むしろ強剛な風土的・信仰的・呪護等の神格をもった表現の仮面ではないかと想像する。例えば風神とか山神とか、産土神とか、魔除・禁忌等の守護神とかいうような類ではなかろうか。

表情は、前頭筋(前額の筋)を強く引上げて深く強い横皺を作り、上下眼瞼の表現を欠如する程に眼球を丸く露出した相貌は、明らかに、驚愕でなければ威赫・示威である。横に広く大きく開口した口裂内に、上下の齒列を多く露出し、この開口形を一層アクセントづけるような、口唇の外周を囲む深く強い鼻唇溝があり、これもまた、威赫・威圧・恫喝等の類であろう。

こうして各顔面筋の作用方向を考察して見ると、眼辺・口辺を中心として、すべて遠心的・放射的に働いていて、表情としては当然能動的な表情の部類に属することになる。但し額正中上の劍状突起と、その下方へ続くV字形の重なりと、その下端を留める鼻根部の皺とが、顔面上部の正中線上に強い accent となつて、求心的に働き、顔面に1種の集中的な緊張感をも表示していると思う。

次に浮嶋面が、このように粗暴な顔貌であるにも拘らず、角・牙・兎唇(俗に『三つ口』という人中披裂の唇裂・Lippen Rinneで、仮面では猛獣性の表現)・棘鬚(竜や鬼などの spina 状の鬚髯)等の猛獣性または妖怪性の鬼畜的な付加物が一切なく、ただ単に異状に強剛な表情だというのみで、何等怪奇な具体的要素を有さない所に、これが鬼畜面の類でなく、神格系の仮面と見るという理由が存するのである。

しかもこの仮面が恐ろしげな顔付で、児童を畏怖せしめるのに十分であると思われるにも拘らず、それほど深刻に意地の悪い兇悪さや凄惨さを持っていて、たくま

る（恐らく作者の非意図的な）無邪気さと諧謔美

(humoresque beauty) をも、ほのかに感ぜしめる所以は、その無機的なびっくりしたような球眼や、装飾化された皺襞や、ひょっとすると大口あいて笑っているかにも受け取れかねない笑情に似た開口形など、なおまた全体としての素朴な稚拙な技巧なども相乗されて、威赫・威圧とは全く反対の道徳的効果をも多少共有することになるのではあるまいか。

因みに浮嶋面では、開口部・虹彩孔（眼孔）・紐孔等はすべて打ち抜かれて貫通して彫られており、開口部中には舌の表現はない。（鬼畜面の中には往々開口部中に舌の表現がある。）なおまた、浮嶋面は表面が全部くすぶった木質の淡褐色を呈していて、彩色の痕跡は肉眼では認め難い。或は赤外線写真にでもよれば、また若干の知見が得られるかも知れないが、現在では一応無彩色としておく。

〈10〉 浮嶋面の地方的特徴

浮嶋面が九州地方独特の性格を有するか、或は汎日本的な類型中の1作例であるか、また作者が九州定住の人物であったか否か、等々の諸問題は、今後の探求と各方面の専門家の指示を受けなければ、今の所一切わからない。ただ1つこの作例が、当初から原地付近で製作されて伝世されたものではないか、ということだけは多少考えられる。

そもそも伎楽面などは、軽量を多く要求されるためか、桐材や乾漆等で作られ、能面に至っては、建築や仏教彫像としても定材となっている桧材を用いているが、浮嶋面は樟材を用いている。樟材は飛鳥時代に仏教彫刻に専用された以外は、あまり常用されないのだが、福岡・大分両県へかけての九州中北部地方では、その土地に樟の巨材を豊富に有したがために、しばしば大型の仏教像さえ樟材が用いられており、この樟材使用は九州における地方色（locality）の最も著しい1特徴と考えられる。従って浮嶋面も樟材であるから、これは中央（近畿地方）などから持参したものではなく、恐らくこの土地に於て、この土地産の材料を使用して製作された

という可能性の方が遙かに多いであろう。

仏教像の中にも、時代や土地によっては、専門の仏師、即ち仏像彫刻家ではなく、僧侶自らが製作した場合もある。弘仁時代（平安前期）における所謂『阿闍梨彫り』などと称されるのが、その素人作りへの呼称である。或は下って生駒瀧海の如く殆ど専門的に彫り得る僧侶も出たし。円空・木喰の如き素朴な素人彫りの僧侶もあつた。

そういう意味で、鎌倉・室町の頃には、猿楽・田楽の法師達の中には、或は作詞・作曲・振付等の言語芸術・音律芸術・体律芸術（舞踊）等ばかりでなく、仮面製作等の造形芸術方面にも若干の手腕を有し、各地を巡遊しながらも、舞楽や能楽ほど厳格な型に束縛されない新興の民衆芸能用の仮面を、比較的自由に半ば創作的に趣向をこらして製作した者が、種々のヴァリエーションを、各地に遺して行ったのではあるまいか。浮嶋面の作者については、目下の所、私はこの程度の推想を持つに過ぎない。

〈11〉 結 語

色々考へては見たが、結局始めに述べたように、由来・仮面名・作者とも万事不明のまま、1歩も出ることはできなかった。これ等の解明には、恐らくこの1面のみの探求・調査を一層細密にするばかりでなく、各地方の多くの仮面の採集調査をなしつつ、これを集約大成して行って、典型的に纏めて行くのでなければ、とても1面だけでは的確な収獲をあげることはできまいと思う。

そこに、九州地方を分担してくれる小野君への多くの期待がかかっており、またこれを受け入れるべき私の研究室の研究の累積や責任もかかっている次第である。

昭和41年（1966）12月31日（土）夜 西田 正秋

〈12〉 仮面関係・文献一覧表

今回の一覧表は仮面関係だけだから、化粧・隈取・險譜・make-up等は一切入れてない。また今回は明治以前の分と、外国書も一切省略した。本表中、戦前の文献が殊に少ないのは、戦災焼失でまだlistが回復していないためである。なお備考の前のNo.は一般読者には関係ない。

No.	掲載誌名	著書名・題名	著者名	年次	No.	備考
1		他見無用・面目利			4661	能面鑑定法 解説書（手書） 木版画
2-3	故実叢書	舞楽図（左・右）	高島千春・北爪有郷	明治 38		
4		能楽大辞典	正田 章次郎	" 41	3494	
5-13		謡曲評釈（9冊）	大和田 建樹	" 40-41	421-429	
14		新謡曲百番	佐々木 信綱校	" 45	404	
15		能謡秘訣	大和田 建樹	大正 2	430	
16	建築工芸叢誌(14)	面頬に就て	寿々木 雪山	" "	4158	
17		仮面劇コマース	John Milton著 菱沼平治訳	" 5	5360	劇論文

18-20		能面大観 (上・中・下)	齋藤香村	昭和	9	968-70	
21-22		面とますく (上・下)	木村助次郎 編		11	3597-8	
23		瓜哇古面譜	三浦秀之助 編		12	3531	木版画
24		能楽の鑑賞	野口米次郎		14	3586	光悦作・能面山姥
25	岩波文庫	花伝書	世阿弥作 野上豊一郎 校訂	昭和	2	396	
26		謡の位と面の話	笠井規矩三郎		4	908	凸版
27		原始民俗仮面考	南江二郎	昭和	4	3972	
28	岩波講座・日本文学	能の舞台的特質	野上豊一郎		6	643	
29		能楽古今記	野々村戒三			3522	
30		能面作家小史	金剛 巖		7	302	
31	ドルメン	仮面特輯号			8	4143	
32	宝雲(9)	天養元年至銘舞楽面に就いて	野間清六		9	3454	
33		古楽面特別展覧会目録	皇室博物館			508(2)	
34	満洲グラフ	銅面	上原之節		10		
35	東京帝室博物館・講演集	我が古仮面に就いて	高野辰之		11	5670	
36	" "	能及び狂言に就いて	野々村戒三			5670	
37		能楽古面集	恩賜京都博物館			(2)	
38	岩波文庫	申楽談義	世阿弥作 野上豊一郎 校訂			907	
39	朝鮮	「仮面舞踊劇」特輯号			12	5959	
40	日本精神叢書	世阿弥と其の芸術思想	野上豊一郎		15	319	
41	造形芸術	伎楽面				3176(2)	
42		能楽研究	能勢朝次		16	3403	
43		吉崎嫁おどし物語	藤岡大愚			388	
44		能楽古面大観	金剛 巖				(No.2950) (2)
45		能謡語彙	観世流改訂本 刊行会編		17	2324	
46	教養文庫	能と能面	金剛 巖			324	
47		面と狂言	高野辰之	昭和	17	261	(26) (1242)
48		能楽三断抄	土岐善磨			653	
49		操人形の顔	堂本寒星		18	4242	
50		西洋美術史論攷	沢木四方吉				古代ギリシャ仮面 (P.361)
51		能面検討	入江美法			252	
52		能面論考	野上豊一郎		19	4037	
53-58		能楽全書(6冊)	" 編			865-70	
59		能楽史研究	小林静雄		20	114	
60		東大寺	清水公俊			2100	伎楽面
61		能のをみなたち	竹内てるよ		21	3237	
62	日本文学選	修禅寺物語	岡本綺堂			162	戯曲
63	新日本文庫	校訂花伝書・能作書	能勢朝次		22	473	
64	工芸(118)	仮面関係	諸氏			5632	
65		能	金剛 巖		23	835	
66	東洋芸術叢書	能面概観	" "			315	
67		能謡図説	佐成謙太郎		23	3549	
68		能謡曲名所旧跡	栗林貞一		25	1241	
69-74		解註謡曲全集(6冊)	野上豊一郎 編		26	2292-97	
75	岩波写真文庫	能			27	1709	
76		開眼の能	小野長生 編			5228	
77		日本の面	野間清六	昭和	28	2207	
78		壬生狂言考	田中緑紅		29	3875	
79		散楽源流考	尾形亀吉			4993	

80		観世家伝来・能面集	片山九郎右衛門 編	昭和 29	5682	
81		Noh	Toyochiro Nogami	" "	2983	
82		日本の仮面	京都国立博物館監修	" 30	2673	
83		撰取の能面	土岐善磨	" "	4985	
84		正倉院伎楽面の研究	石田茂作	" "	5581	
85		平泉	中尊寺	" 31	2862	延年の舞・仮面
86		能の歌舞伎系譜	松本亀松	" "	3402	
87-9	岩波文庫	能狂言(上・中・下)	笹野堅校訂	" "	2984-6 (2)	
90		狂言面	野村万蔵	" "	3809	
91		面	野間清六	" "	4796	
92	新国語国文講座	謡曲・狂言	市村宏	" "	3551	
93	アサヒ写真ブック	中尊寺		" 32	3126	延年の舞
94		校註花伝書	川瀬一馬	" "	3061	
95	芸術新潮(9月)	「首」の造形	斎藤清二郎	" 33		
96	アトリエ	世界の面		" 34	5388 (3312)	
97-8	観世(6, 7月)	能面特集(1・2)	諸氏	" "		
99		能の面	鈴木慶雲	" 35	4248	
100		能面の家	曾野綾子	" 35	3743	小説
101	国立近代美術館	現代の眼		" "	3665	
102		仮面の美	金子良運	" 36	4406	
103	大和文化研究	東大寺伎楽面考	岡直己	" 37	5589	
104	現代教養文庫	民俗芸能	本田安次	" "	4216	
105		仮面の民俗学	Jean-Louis Bédouin	" 38	4534	
106-7	大和文化研究	獸身紋鬼板通考(前・後)	齋藤正二 訳	" 39	5238-9	
108	"	乾漆造伎楽面考	岡直己	" "	5590	
109		能面史研究序説	後藤淑	" "	4941	
110		能と能面の世界	中村保雄	" "	4892	
111		続 "	"	" "	4893 (4468)	
112	芸術新潮	能面		" "	4969	
113	そめとおり	嵯峨面の家元		" "	5209	
114		能面と能装束	京都国立博物館	" "	5186	
115		能面選	"	" 40	5657	
116		正倉院の宝物	正倉院事務所	" "	5518	
117	美術手帖	「日本の仮面」特集		" 41	5781	
118	アカデミア(53)	能面表情の識別的研究	泉ひさ	" "		
119		大南洋の芸術	上野松坂屋		4460	
120	芸能復興	各号諸説	民俗芸能の会			
121	思想(1月)	能面研究・小面の眼辺の動勢 に関する1考察(P.33)	西田正秋	昭和 6	92	
122	日本歯科学会雑誌	美術に於ける歯牙の美的効果 に就て、特に能面「小面」に 於ける考察	"	" 11		
123	画説(8月)	能面測定を試み	"	" 14		
124	民俗芸能	民俗芸能の仮面	"	" 29	2310	
125	これくしょん	狂言面の話	"	" 33		
126	観世(7月)	能面の彫刻性(P.26)	"	" 34		

その他省略。以上昭和42年(1967)1月8日(日)調

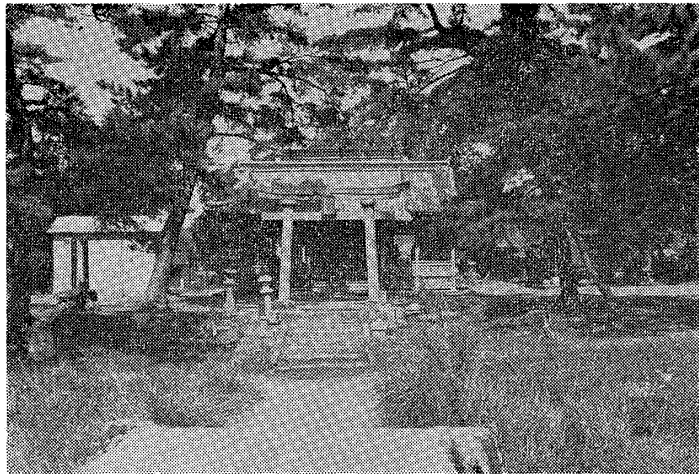


Fig. 1 浮嶋八幡正面景観



Fig. 2 仮面・前面

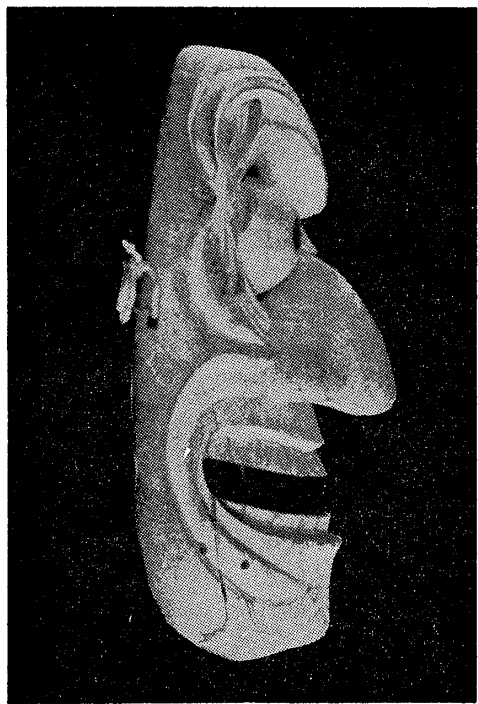


Fig. 3 仮面・右側面

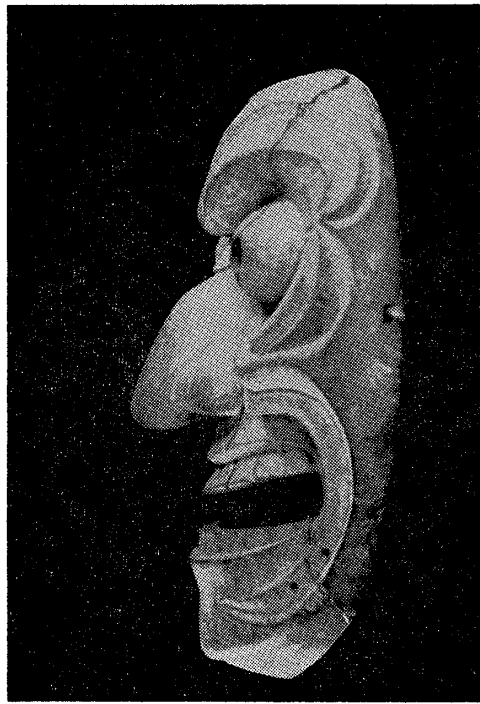


Fig. 4 仮面・左側面



Fig. 5 仮面・左斜側面



Fig. 6 仮面・裏面

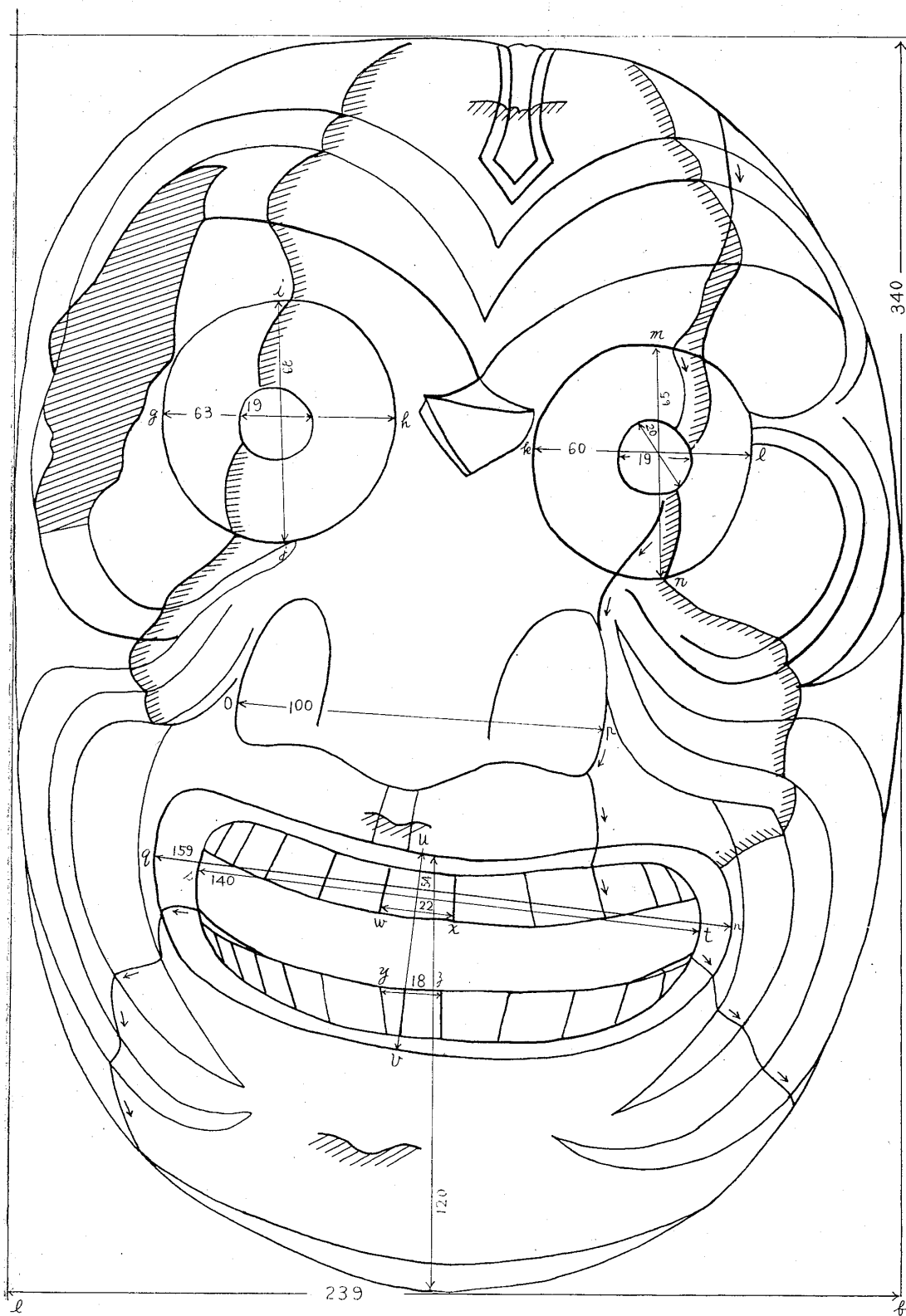


Fig. 7 仮面・前面図 原図実物 $\frac{1}{4}$ ×凸版 $\frac{1}{2}$ 小野一郎原図

凡例



仮面の凹凸説明図



仮面の割れ目



剥脱部分

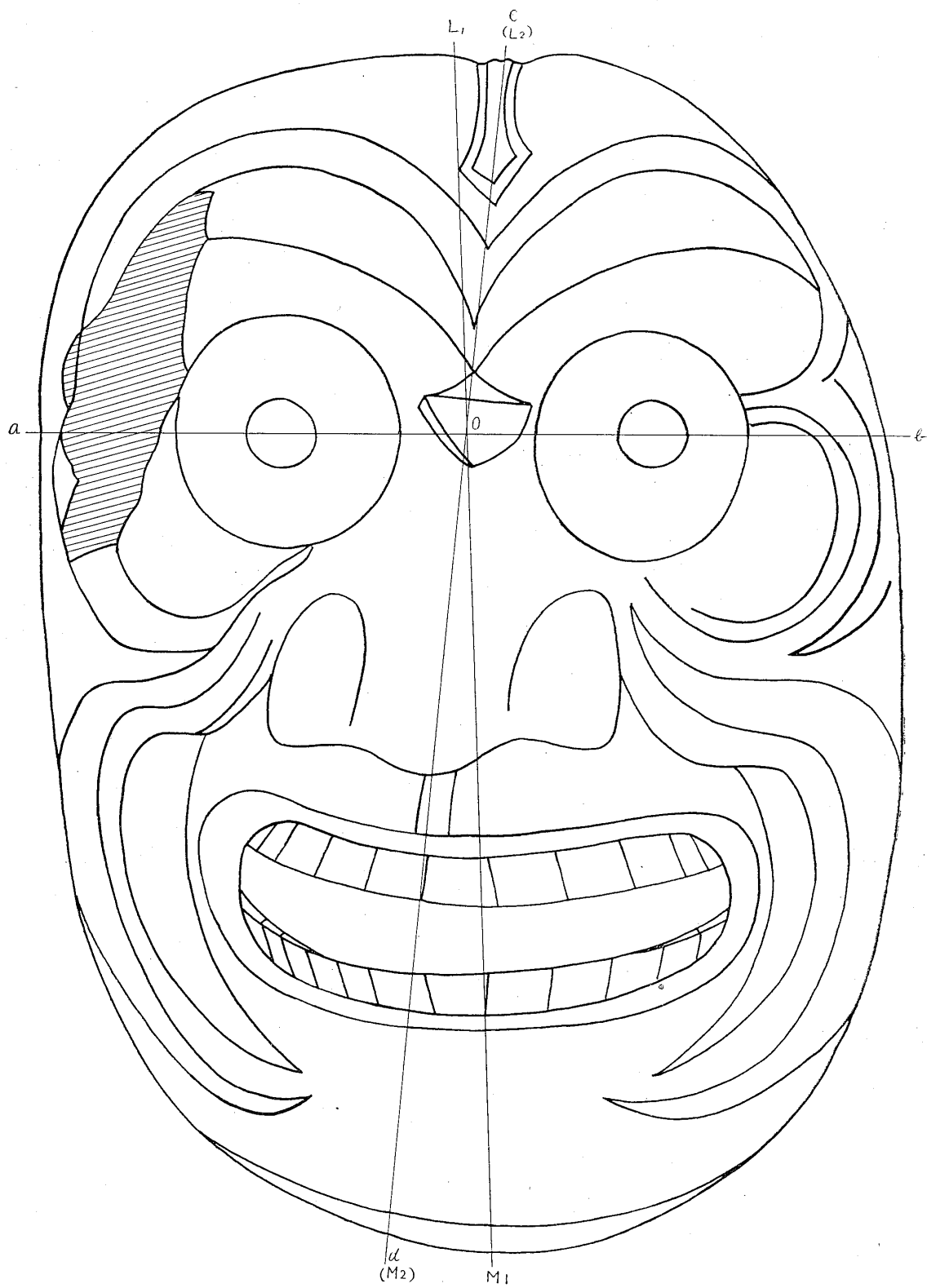


Fig.8 仮面・正中線想定図 原図実物 $\frac{1}{4}$ ×凸版 $\frac{1}{2}$ 小野一郎原図

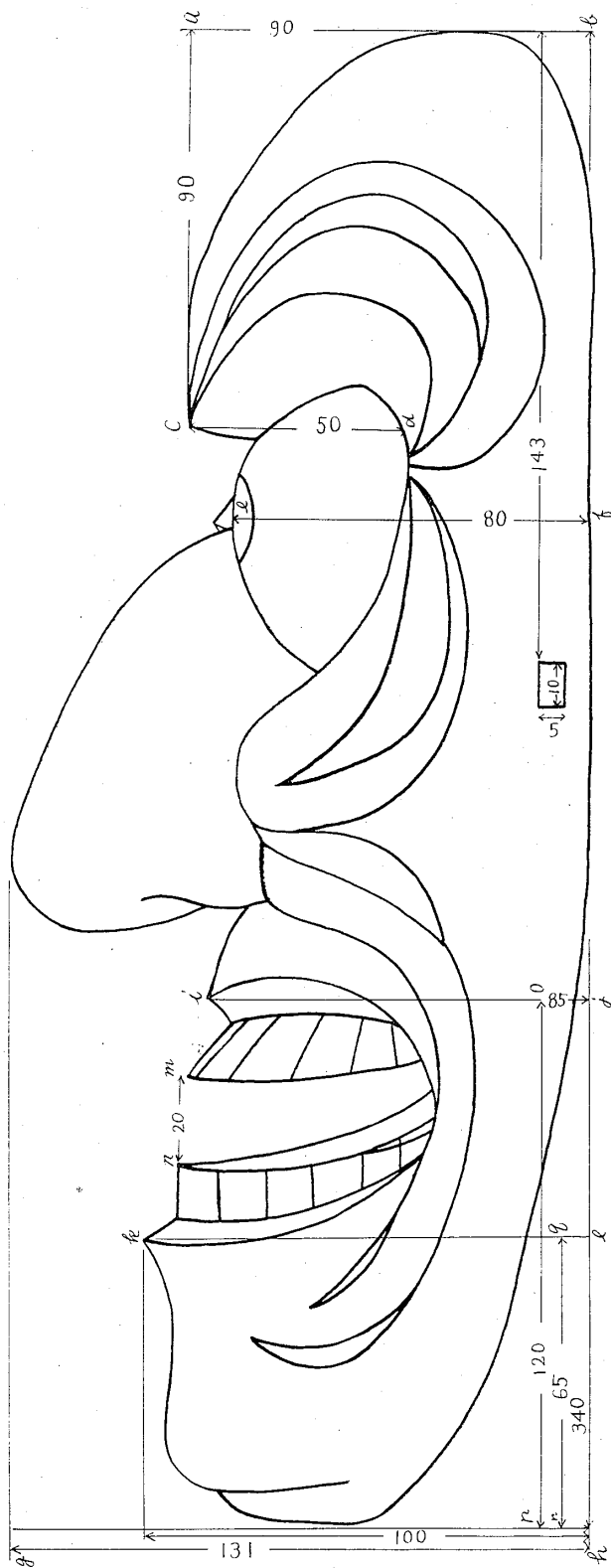


Fig. 9 仮面・左側面図 原図実物 $\frac{1}{4}$ ×凸版 $\frac{1}{2}$ 小野一郎原図

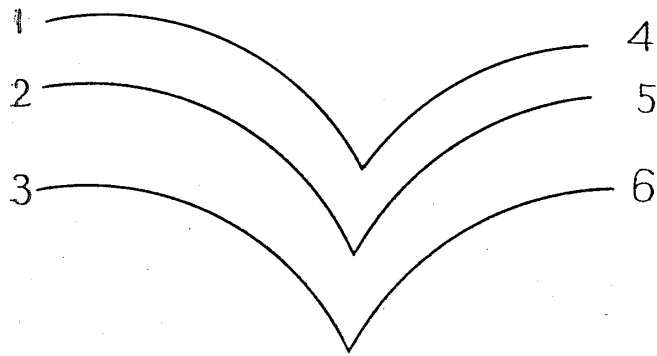


Fig.10 額横皺説明図 小野一郎原図

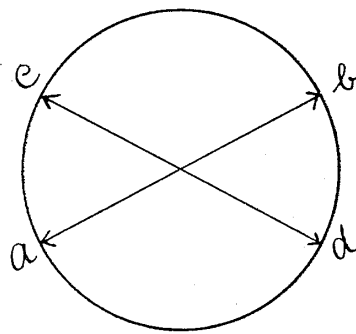


Fig.11 眼球説明図 小野一郎原図

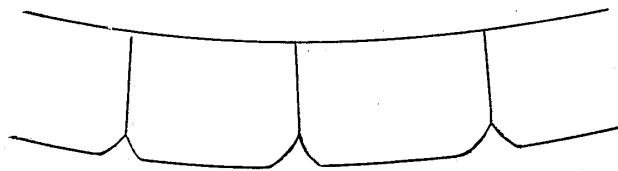
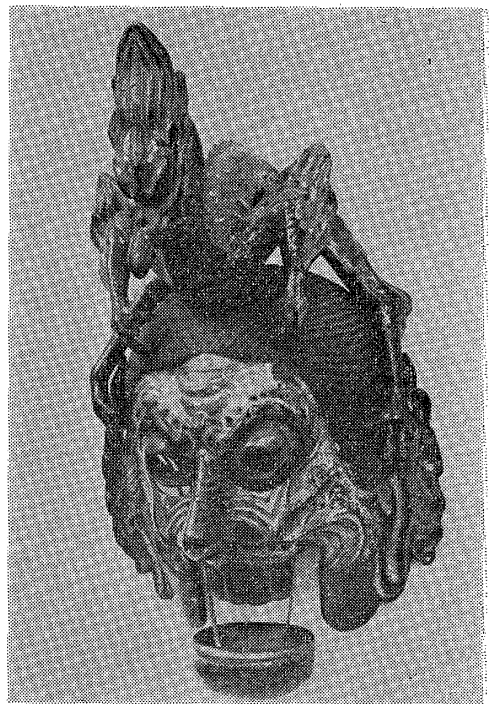


Fig.12 下齒上面説明図 小野一郎原図



第1图 退宿徳・舞楽面・木彫彩色
鎌倉時代・奈良・手向山神社



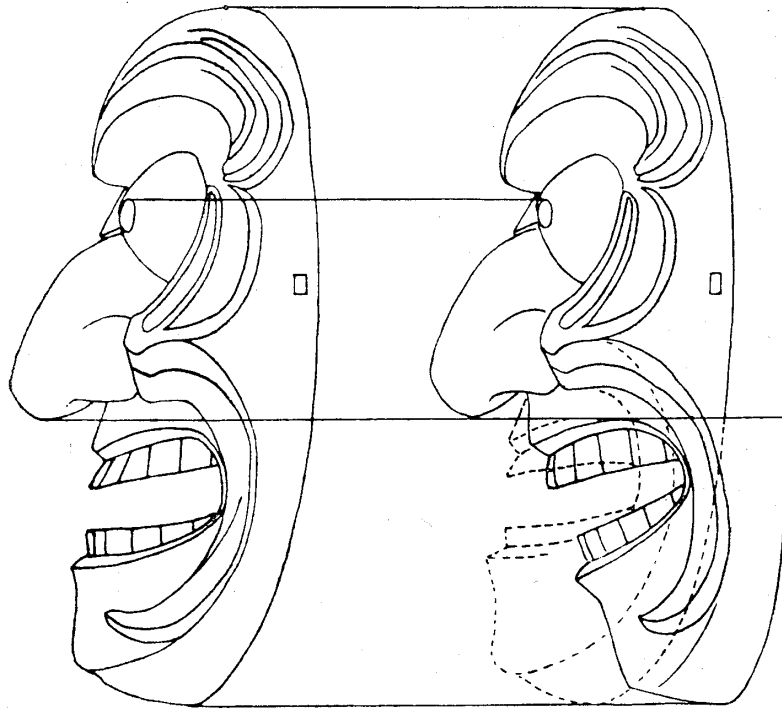
第2图 蘭陵王・舞楽面・木彫彩色
鎌倉中期・奈良・東大寺



第3图 納曾利・舞楽面・木彫彩色
鎌倉時代・愛知・熱田神宮



第4图 還城楽・舞楽面・木彫彩色
平安中期・奈良・法隆寺



第5図 浮嶋面・歪曲性説明図 ・西田正秋原図



第6図 採桑老・舞楽面・木彫彩色
鎌倉中期・広島・巖島神社